様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：１４７０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２５２０２４５

研究課題名（和文）英国１８世紀ピクチャレスクの森林描写における自然観

研究課題名（英文）Views upon nature in the picturesque writings for woodlands in the 18th Century Britain

研究代表者
今村　隆男（IMAMURA, Takao）

和歌山大学・教育学部・教授

研究者番号：９０１９３６８０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,000,000円、（間接経費）　300,000円

研究成果の概要（和文）：近代科学としての生物学や植物学の本格的な発達は19世紀にはいってからようやく顕著になるが、これらの学問が未だ博物誌的観察や単純な分類学の水準から完全に脱していなかった18世紀後半のイギリスにおいて、森林や植物をめぐる景観の持つ表象性は、近代科学前夜の環境観を前進させるのに小さからぬ役割を演じた。その中でも重要であるのは、18世紀後半以降徐々にイギリスの風景言説においてヴァナキュラーな森や庭やコテージ建築などから構成されるヴァナキュラーな風景が尊重されるようになっていったことである。それはあるべき社会の表象としての意味を担っていたと同時に、身の回りの植物を生態系として把握することに繋がった。

研究成果の概要（英文）：In the second half of the 18th Century and the beginning of the 19th century Britain where some modern sciences such as biology, botany or ecology were not well developed, the allegory of trees and plants in the landscapes had an important roll to advance environmental views on nature. Especially, what can be called vernacular landscapes, consisting of vernacular woods, gardens and cottages, are gradually valued, which could be allegories of the British society. Such vernacular landscapes lead to the distinction between the native and non-native, and the germination of a perception of ecosystem.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：英米文学

キーワード：イギリス文学　イギリス文化　森林　景観　ピクチャレスク　ヴァナキュラー　庭園

１．研究開始当初の背景

本研究のテーマを極めて簡潔にまとめれば、18 世紀後半にイギリスの森林観がどのように変化していったのかを文献の中に明らかにするというものであるが、この問題を取り扱う際に柱となるのは 1990 年過ぎに出現してその後次第に定着して行った環境批評の研究方法である。イギリスにおける環境批評の最初と言えるのは J. Bate, Romantic Ecology であるが、申請者（今村）はこの批評書の主張、特にその中のワーズワスの『湖水地方案内』の取り扱いに感銘を受け、その後、ワーズワスに影響を与えた 18 世紀後半のピクチャレスクの時代の旅行記やガイドブックの分析に取り組んで来た。具体的には、本研究の開始まで「ワーズワスの風景観と『多様性』の『調和』―『湖水地方案内』におけるエコロジーの視点 ―」(2000)を皮切りに、ウィリアム・ギルピンを始めとしてアーサー・ヤングやウィリアム・グリーンらによる文献における景観への見方を総合的に論じて来た。『湖水地方案内』においてワーズワスは外来種である落葉松の植林を痛烈に批判しているが、その視点はどこから来たものなのかをピクチャレスクの時代の文献の中に明らかにしようとしたのが、本研究の出発点である。

この研究テーマに関わる先行研究はどうであったかと言えば、国内では研究テーマが重なるものは殆ど無く、関連するピクチャレスクについての研究は美術史と哲学（美学）の方面からのアプローチであった。一方で国外においては、ピクチャレスクは複数の分野にまたがる概念であるため近年の学際的な研究の対象となり、様々な方面からのピクチャレスク研究は増えつつあった（現在も同様である）。本研究に関する基本的文献としてまず必読と考えられるのは、A. Bermingham (1986)の Landscape and Ideology と M. Andrews の The Search for the Picturesque (1989)である。Bermingham は森林伐採や囲い込みによる地域社会の崩壊を隠蔽するものとしてピクチャレスクの人工性や形式的側面を強調しており、この時代の風景描写にこそ近代的自然観の萌芽を見出そうとする申請者とは正反対の立場をとっている。Andrews は、地域ごとにこの時代の紀行文などを分析しており、その点においては非常に詳しいが、他ジャンルの著作との関連や環境的視点には欠ける。この他に、上述の J. Bate, Romantic Ecology はピクチャレスクには殆ど触れていないが、同じ Bate の環境批評の第二作 The Song of the Earth (2000)はピクチャレスクについて一つの章を割いていて参考になる。しかし、そこでは 1790 年頃までに書かれた文献が主に考証の対象とされている上に、そのピクチャレスク観はワーズワスの見方と同様に「表層的」な域を出ていないと考えられ、ピクチャレスクからロマン派への橋渡しとなる 1790 年代の文献を考察することよって反論する余地があると考えた。また、1790 年代はフランス革命を背景に海外からの刺激によって国内の様々な分野における言説が激変していった重要な時期であるが、すでにアメリカとの独立戦争が戦われた 1770～1780 年代から社会の変質は始まっており、さらに産業・農業革命とも重なるこれらの時期はまさにピクチャレスクの流行期に当たるのであり、この時期全体を視野に入れて研究を進める計画をたてた。

特に 1790 年代を中心にした文献の解読に注目する契機となった申請者の二つの拙論を挙げておきたい。まず「ピクチャレスクと風景美 ― 旅行記、庭園論における森林と雑草の描写について」では、雑草への肯定的な見方が 90 年代において現れて来たことを明らかにした。雑草は自然の有用性とは無縁であるので、このことは自然に対する人間中心的な視座がこの時期に変化し始めた可能性があることを示している。次に、「ピクチャレスクの変遷 ― ギルピン『ワイ川紀行』と『ニューフォレスト森林風景』」においては、70 年代と 90 年代の同一の作家による著作を比較し、そこに描写方法の相違があることを論証した。特に、伝統的自然観に染まった自然の表象性を徹底して排除しようとしたピクチャレスク初期の風景描写に比べ、後期の著作では表象的要素が復活する傾向があり、それは旧来のキリスト教の自然神学的なアナロジーなどを使用しつつも、新しい多様性と調和を重んじる現代のエコロジー的自然観に結びついてゆくものであったという仮説をたてた。

以上の研究成果を踏まえた上で、本研究ではピクチャレスクの流行の初期から成熟期の 1790 年代の文献まで対象を拡大して段階的・系統的に整理しつつ、時代の流れによる変化を見極めながら各々の時期における環境観の発展をできるだけ多くの関連分野の文献を分析しつつ明らかにしてゆくという手法を取ることにした。

２．研究の目的

18 世紀後半から末までの時代を中心に森林風景に関わる諸分野の文献を分析することによって、表面的な風景美への視点から生態系として森や植物を考える視点がどのように現れてきたのか、などの問題を考察するのが本研究のテーマである。研究開始当初において特に関心を持っていたのは、博物誌や生物学などといった科学的な視点の発達が自然観の変化を促していっただけでなく、アナロジーやシンボルのような伝統的な文学的表現の関与も小さくなかったのではないかという点である。18–19 世紀は、科学と文学など他の分野との区分が明確にはされなかった時代である。C. Darwin の『種の起源』においても、G. Beer が主張しているように、

シンボルやメタファーなどの技法がしばしば使われて伝統的な表現法の枠内で全く新しい発想が語られていた。本研究は、この他の面にも視野を広げながら、森林風景の描写に多面的なアプローチを行うことによって、環境意識がどのように誕生していったのかという重要な問題に対する答えの一端を明らかにすることが目的である。

３．研究の方法

環境批評も含めてピクチャレスクの自然観を一面的なものと捉えて来たこれまでの研究は、ワーズワスが代表作 The Prelude(1805)の中でピクチャレスクの表層性を批判し、ロマン派との非継続性を強調してきたことに多大な影響を受けていると思われる。それに対し、本研究は一般的に言われているようにロマン派の時代ではなく、18 世紀後半の限られた 30 年ほどのピクチャレスク流行の期間に自然観の転換があったと前提し、そのピクチャレスクの動きを、１）1770 年代のピクチャレスクの形成期、２）1780 年代のピクチャレスクの展開期、３）1790 年代のピクチャレスクの成熟期、という三つの時期に分けて段階的な発展の過程として捉える（前述のように、この中でもロマン派の活動開始期の直前の 1790 年代の文献には特に注目している）。そして、ピクチャレスクに関連する、イギリス近代の旅行記、政治論、庭園論、農業論、博物誌などの諸分野の文献における森林や樹木に関わる描写全般を取り上げて分析すると共に、これらについての近年の先行研究書、特に歴史批評と環境批評の理論に関わる批評書によって、本テーマに関わる研究の現状と問題点などを明らかにしながら進める。

４．研究成果

ピクチャレスクの風景描写はクロード・ロランらの外国の画家による風景画を範とした視覚的描写からまず始まったが、その中で最初は「風景美を補足する」ものであった森林風景は、次第に「風景美に不可欠」の要素であると評価されるように変わってゆき、それと共にどのような森林風景が望ましいかが活発に議論されていった。木々の伐採やそれを補う植林が盛んに行われた 18 世紀後半、多様な種類・樹齢・状態の木々によって構成された、人間の手の入らない森の姿こそが最もピクチャレスクな森林風景であると捉えられるようになるが、そこには同じ種類・樹齢・状態の木が整然と配置された、主として外来種からなる植林の森の姿との比較の中で自然林のあるべき姿が初めて意識されるようになっていった過程が読み取れる。ワーズワスが『湖水地方案内』の中で森の形成過程を団栗の実を出発点として詳細に説明しているのはこの延長線上にあり、ここには生態系として森を捉える視点の萌芽が見出せる。

一方、W.マーシャルのような農業家のみならず、ピクチャレスクの旅行記で名を馳せた W.ギルピンまでもが、風景描写を含む文献の中で個々の種類の樹木について詳細に解説しているが、これは C.リンネらによって発展していた植物の分類学の影響によることは明らかであり、総合的に見て植物分類学や博物誌などの進歩が生態系への視点を生んだことは確かである。しかし、この方面においては 18 世紀後半は J.バンクスや G.ホワイトらによる博物誌的観察の域を出ず、J.リンドリーや W.J.フッカーらによって近代的な植物学が進展し始めるのは海外からの植物が大量に流入し始める 1820 年頃以降であったと考えられる。従って、本研究が対象とする 18 世紀後半は未だ科学的な視点による生態系へのアプローチは十分には発達してはいなかったと言える。実際に、その時代の文献には先行書の無批判的な踏襲という面も少なからず見出せる。また、マーシャルらによる農業関連書は、ピクチャレスク的美観と有用性との両立を目指したラグルズなどのわずかの例外を除いて、その目的が樹木の有用性に限られており、そこでは資源としての材木観が生態系への視点を妨げていることが確認できる。

森林に対する科学的な目の進歩が以外に遅々としていた印象を受ける一方で、その逆に伝統や慣習への依存が大きいように思われながら実際は環境意識の進展に小さからぬ影響を与える革新性を有していたと考えられるのが、森林や樹木の表象的描写である。批評家 M.プライスは「ピクチャレスクの展開」(1965)においてピクチャレスクの最大の特徴を風景の表象性の否定に見ているが、ピクチャレスクの後半、特に 1790 年代の関連文献を精査すれば、風景の表象性はそこでも小さからぬ役割を果たしていたことが認められる。

ピクチャレスクの流行の中で変化したのは、風景における表象性の有無ではなく、表象の内容であると考えられる。18 世紀前半に J.ダイヤーの「グロンガー・ヒル」などにおける地誌詩に描かれた風景描写が有していたステレオタイプ的なモラル的表象は、世紀後半になると宗教観や政治・社会観の変化によって姿を大きく変えていった。一例を挙げると、後期のピクチャレスク美学の代表的な理論家 U.プライスが庭園論の中で描いている理想的な森林の姿は、社会の構成員がその多様性に応じて各々の社会的役割を果たしながらも旧来の上下の階級的秩序を崩すことのない、彼にとってのあるべきイギリス社会の表象であり、その底流にはフランス革命の波及を恐れるバークらの保守的社会論がある。また、この背後には相反する社会観を持ちながらも双方が共にその「自然権」を主張する、バークらの保守派とペインらの革新

派の双方による「自然」をめぐっての議論も存在し、それは物理的自然の表象にも影を落とすものであった。プライスやナイトらが外来種の植林を否定して自生種の自然林を尊重した背景にも、間違いなくこの時代特有のナショナリズム的思考があるだろう。プライスにもすでに落葉松批判は見出せることから、ワーズワスの森林観はそこから影響を受けていると考えられる。ワーズワスの描写には政治・社会的表象は直接には見出せず、一方でそれは、上述のように、森林の有機的生成過程や生態系としての森林の把握が基礎になっていると考える事も可能で、その微妙な相違にワーズワスにおける近代的環境観の萌芽を認めるという J. ベイツらの環境批評の主張にも耳を傾ける必要があるだろう。しかし、小田友弥の「ワーズワスと湖水地方史」などが明らかにしたように、ワーズワスの田園描写には理想化された側面を否定できず、故郷の湖水地方は詩人の理想とする社会のミクロコスモスであるという意味では、プライスらの思考パターンの継承という面もそこには認められる。

ワーズワスによる田園社会の理想化の原点として考えられるのは、18 世紀半ばから認められるようになった、イギリスの農業労働者を社会階層の中の「中庸」に位置に置き、国家を支えるものとしてその社会的重要性を賛美するという、J.ブラウンやハチンスンらの文学から認められる傾向である。この風潮は、海外の植民地との交易や都市部での産業構造の変化によって台頭して来た新興商業階層に対する、旧来の支配者であった地主階層からの反発がその主な原因であると考えられる。世紀後半になるとアメリカやフランスなどとの摩擦の中で、伝統的階級社会の枠組みの範囲内で農業労働者の美徳を強調することによってその反感を押え込んで既成社会の仕組みを維持しようとする言説が台頭し、そこからイングリッシュネス（あるいはブリティッシュネス）の追求が始まってゆくことになる。その中で、イングリッシュネスを象徴するものとして森や労働者の庭が捉えられ、そこに自生種あるいは在来種とみなされた植物群が不可欠の付属物となってゆく。

コテージャーやコテージ・ガーデンの理想化の背景には、18 世紀に関心が高まったプリミティヴィズムやパストラリズムの影響があると考えられる。社会の急激な近代化への反発として原始的なものへの回帰願望が生じて来たことはよく知られており、一例を挙げるとフランスの建築家 M.A.ロジェの『建築試論』などの影響によって、コテージの玄関ポーチの柱に加工していない原木の枝をそのまま使うなどといった流行にプリミティヴィズムは象徴的に現れている。また、パストラリズムは西洋文化の中では伝統的なものであるが、この時代には田園に装飾用コテージを富裕層が建てるといった単純なパストラリズムが流行した。その一方で、現実の田園生活の厳しさを表現するアンチ・パストラリズムも共存していたことも付言しておく必要がある。いずれにせよ、近代化によって激動してゆく社会の中で、自らの原点を確認することで現在の自らの位置を検証し、これから歩むべき方向性を模索しようという意図がそこには認められる。そしてこの動きは、19 世紀にはいると自然環境や生活・文化環境におけるヴァナキュラーの追求を促したが、それは生態系としての身近な自然の理解へと繋がるものであったと考えられる。

個別の植物が自生種かどうかという問題は、国内の先行する時代の文献に見られる解釈を踏襲しつつ、リンネらによる海外からの新しい知識を加えるという形で判断されていたと考えられる。しかし、18 世紀は近代科学（植物学）は未発達であり、この点についてもやはり象徴的な要素、つまりその植物の持つ「イメージ」を無視する事はできない。また、自生種という場合、いつごろの時代を基準とするのかという問題も存在する。18 世紀後半においてイングリッシュネスの源とみなされたのは、チューダー朝であったと申請者は考えている。それは J.イヴリンが『シルヴァ』によって森林破壊に警告を発して植林を奨励する 17 世紀より前の時代であり、それが事実かどうかは関係無く理想的な森もイギリスの繁栄の最初の時代であるチューダー朝まで遡る必要があると考えられた。

18 世紀後半には農業労働者の住むコテージの悲惨さに世間の注目が集まるようになるが、チューダー朝には労働者の住環境はそれほど悪化していなかったと、これも事実かどうかは関係無く当時はみなされていたようである。また、自由に耕作できるコテージ・ガーデンがチューダー朝のコテージには付属しており、1790 年代から始まるアロットメント運動はその時代を模範としたものであったとみなすことができる。18 世紀後半になってコテージの改良が行われ始めた時に、コテージやその庭には国家を支える「中庸」の労働者が住むのにふさわしい要件を満たす事が求められたが、そこでもチューダー朝に起源を持つイングリッシュネスが追求された。そこで確立していったのが、スイカズラやバラ、ジャスミン、ツタ類などによって構成される、イングリッシュネスを具現するコテージ・ガーデンであった。ワーズワスが『湖水地方案内』の初版（『選り抜きの風景』）において理想のコテージ・ガーデンの中心に象徴として据えた「スコットランド樅」を改訂版では「背の高い樅」と書き換えている背景にも、イングリッシュネスの追求があるのではないかと思われる。20 世紀にはいって G.ジーキルらが賛美することになるコテージ・ガーデンの原型は、プライスやワーズワスの記述にすでに詳細に描写されていたのである。しかし、上記のコテージ・ガ

ーデンの植物は自生種であるという明らかな根拠は乏しく、科学的というよりも象徴的な根拠からイギリスの庭にふさわしい「自生種」の植物で満たされたコテージ・ガーデンの「イメージ」が創造的に形成されていったものと考えられる。（しかし、この点については時間的余裕がなく明確にはできなかった。）

以上のような経緯によって、ヴァナキュラーな森や庭やコテージ建築などから構成されるヴァナキュラーな風景が尊重されるようになっていったとまとめられるだろう。そしてそれは、あるべき社会の表象としての意味を担わされるようになっていった。近代科学としての生物学、植物学あるいは生態学の本格的な発達は 19 世紀の半ばから顕著になるが、これらの学問が未だ博物誌の水準から完全に脱していなかった 18 世紀後半の時代、森林や木々、植物をめぐる風景の持つ表象性は、近代科学前夜の環境観を前進させるのに小さからぬ役割を演じることになったと考えられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

① 単著：今村 隆男「18 世紀におけるコテージの改良―ナサニエル・ケントとジョン・ウッド 」和歌山大学『和歌山大学教育学部紀要』（人文科学編、和歌山大学教育学部）、査読無し、第 64 集 2014 年、27-31

② 単著：今村 隆男「農業と風景美 ― ラグルズ『ピクチャレスク農法』 」和歌山大学『和歌山大学教育学部紀要』（人文科学編、和歌山大学教育学部）、査読無し、第 64 集 2014 年、33-36

③ 単著：今村 隆男「ギルピン『湖水地方紀行』における想像力・森林伐採・廃墟」和歌山大学『和歌山大学教育学部紀要』（人文科学編、和歌山大学教育学部）、査読無し、第 63 集 2013 年、11-17

④ 単著：今村 隆男「ウィリアム・マーシャルの植林論」和歌山大学『和歌山大学教育学部紀要』（人文科学編、和歌山大学教育学部）、査読無し、第 61 集 、2011 年、31-37

〔学会発表〕（計１件）

① 今村 隆男「ピクチャレスクとワーズワス―ヴァナキュラーの原点として」（イギリス・ロマン派学会第 37 回全国大会シンポジアム「庭園史のなかのロマン派詩人たち」2011 年 10 月 22 日、 山梨大学）

〔図書〕（計０件）

〔その他〕
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
今村　隆男（IMAMURA, Takao）
和歌山大学・教育学部・教授
研究者番号：90193680

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし